風韻

第19号

（昭和五十四年度）

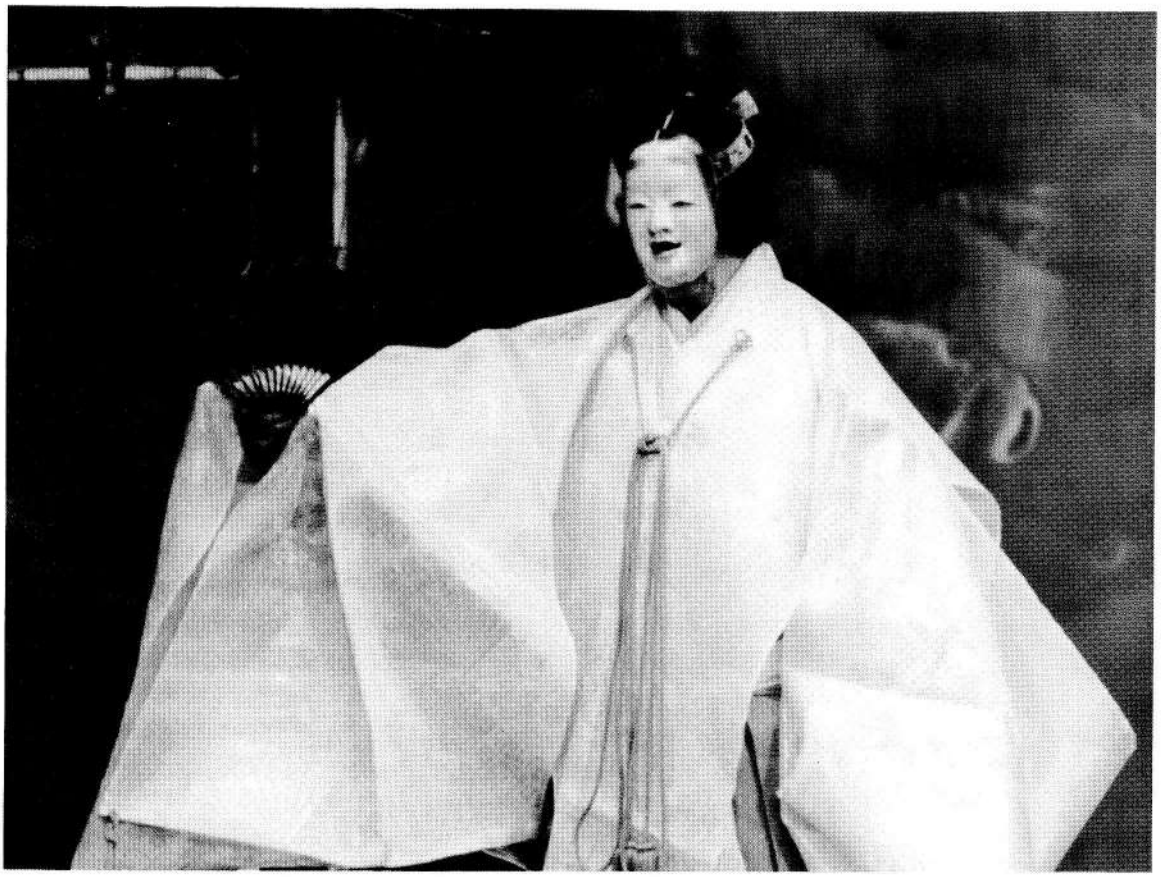
神戸大学風韻会

風　韻　第19号　目　次

◎　六十年の思い出（その一）……師　匠　宇治正夫……1
◎　「ことば」について……会　長　荒川祐吉……2
◎　風韻ＯＢ会発足について……4
◎　学生座談会　－風韻ＯＢ会発足にあたりて－……6
◎　先　輩　登　場……旅と謡……旧　1　藤井　茂……8
姫路時代のこと…新１１　久下昌男……9
声の出ない日に…新１９　高島千秋……10

◎　謡をはじめてはや一年……Ｊ３０　門之園辰志……12
Ａ１３　能勢恒男……13
Ｔ３０　藤裏　聡……13
Ｐ３０　金山久仁子……14
Ｌ３０　小谷直子……14
Ｌ３０　山下美登利……15
◎　風韻会のあすを担う……Ｓ２９　古沢　智……16
Ｅ２９　嶋畑佳久……17
Ｊ２９　田中邦子……18
◎　仕舞三年謡十年というけれど……Ｔ２８　戸田真弘……20
Ｐ２８　岡田裕子……21
Ｐ２８　日下恵津子……22
◎　今卒業の時をむかえて……Ａ１０　井戸正二……24
Ｐ２７　樽本玲子……25
Ｅ２７　伏見和政……26

◎　あしあと（昭和53年度活動報告）……27
◎　決　算　報　告……29
◎　新　役　員　紹　介……30
◎　幹事長就任にあたって……Ｂ２９　反田雅之……30
◎　昭和54年度行事予定……30
◎　名　簿　変　更　通　知……32
◎　風　韻　会　名　簿……34
◎　伝　言　板……35
◎　編　集　後　記……36



半蔀……宇 治 正 夫

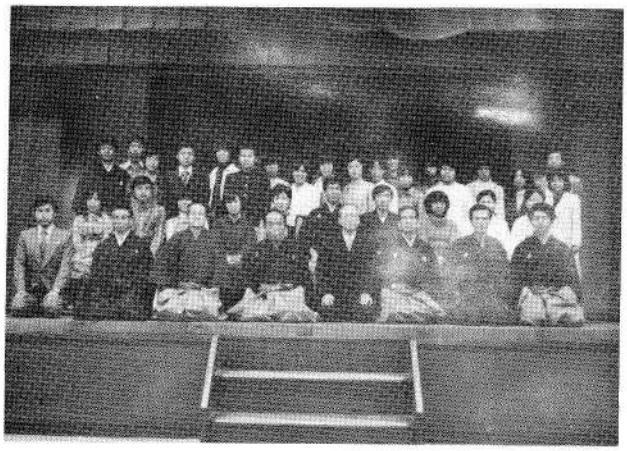
昭和５２年１０月１日
於　　大槻能楽堂

ジュニア合宿

（於　天上寺）

夏　合　宿

（於　余　護）



昭和５３年秋季発表会

（於　神大学館ホール）

六十年の思い出（その一）

師匠　宇治正夫

大正の始めに湊川のトンネル北に本格的な能楽堂が建設される迄は、生田神社と和田宮神社に舞台は立派なものがあって、折ある毎に能楽を奉納されたが、観衆の席はその都度天幕を張って作ったものでした。そのほか謡の会は、宮さんや寺の広間を借りたり、料亭の座敷で催したものです。大正の中頃迄は演ずる所と聴衆の席との間に障子屏風を立てて催したもので、神戸では一流の会は、再度筋の堀割の西側にあった山手倶楽部で催され、聴衆としては二三十人程度で五十人も来られると、今日は盛会であったと喜んだものです。従って演者の態度等は、見所の人には見えない為に少々行儀の悪い事も出来、また気楽に振舞えた次第でもありました。それが何時からともなく障子を除くようになり、段々と婦人が舞台へ上っても良いようになり、公開して大勢の人に見て貰うようにもなって来て、いろいろの点で目覚ましい進歩を遂げました。見方によっては歎かわしい点も出て来る事は、何の為に於いても止むを得ない事でしょうか。

思い出しても懐かしいのは、毎年正月の四日に和田神社、七の宮神社、生田神社、聖徳太子廟へ翁の面掛の式を奉納したことで、手塚（その当時は大西）亮太郎先生以下七八人で奉納した後で神酒を頂いて、その頃の寒い風を受け乍ら人力車を七八台も列ねて次々と神社を廻り、夕方迄心をこめ力一杯神前で謡い尽した時の心持は何とも形容の出来ないすがすがしいものでありました。

また姫路では毎年十一月十五日に総社で五番立の神能があり、これも毎年参加させて頂きました。総社の舞台も橋掛の長いのがあって立派な舞台でしたが、平常は全部板囲いで閉鎖されている為風雨が吹き込み、あれ方がひどく、舞台の板は木目が立っていて、座っているととても足が痛みました。その上人手不足の為私等は五番共出なければならず、さらに遠方のこと故前夜宇多川と云う立派な旅館で歓待を受けて、うれしさのあまりと若い者の事とて眠っていない為午後になると居眠りをしそうで、おまけに隣地では、サーカス団がドンチャンやっていて、能の勘心の時に全然聞こえないことも応々のことで、いろいろと苦労もしたものです。また観衆の人も大変で、テントの下に前日から夜具や火鉢なども持ちこんで夜通し席を確保しなければならず、食事の事や色々と物入がかさんで今日の高い席料の何倍かは費なえる訳ですから。しかし能を見る機会は年に一度のことですから、随分熱心に見ていて下さるので、神々しい気持ちでございました。

また大阪では、天王寺に能楽殿が建ったのが大正の始めで、その頃南地に明月廊というゆかしい料亭があり、そこでよく会が催され

ました。そのころは大低の会の番組には九時始めと書いてあるのですが、いつの場合でも九時には一人も見えませんで、十一時近くになってやっと数人顔がそろい、ぼちぼち始めましょうかという次第。したがって終曲は夜に入り、そのあとで必ず宴会が始まり、散会は十二時過ぎになり、もっともおそかったのは、十二時すぎてまだ謡が二三番も残っているということもありました。しかしその頃は何時になっても乗物はあり、泊まっても安くてサービスが良いので何の不自由もありませんでした。

反対にまた厳しいこともまたうれしい思い出です。本も今の様にしわしい節はついておらず、ことごとく師伝による次第です。先生の謡われるのがちょっと違うときなどそのことを言いますと『本を直しておけ』といわれたものです。

謡の方も多分にその人の自由にまかされた様ですが、ある会の時羽衣のシテを元老格の人が謡って、ワキが『あら恥かしやさらばとて、羽衣を返しあとおれば』と謡ってもなかなかシテが出られないので、地に出ておった玄人の人が小さい声で『小女は衣を』とつけたところが『あれは物著のところだ』としかられ、さんざんあやまったことがあります。出過ぎたことは絶対に許されないということで、先輩には絶対服従ということも美しい感じです。

振り返ってみてみな忘れ難い思い出であります。

「ことば」について

会長　荒川祐吉

年に一回、また「風韻」への寄稿の季節がめぐってきました。私は、ものを書くのが商売ではあるけれど、研究者とか学者というものは、自分の専門外のことについて書くとなると、かえって憶病にもなり、おっくうにもなるものです。

今まで、私が「会長」になってから、毎年この欄に何かのことを書きつらね、読者の目をけがしてきましたが、正直いって、私にとっては、この寄稿はいつも或種の心理的苦痛をともなっています。第一、皆様に読んで戴くに足る内容を持った文章をかくほど、私自身の内容が充実しているとはいい難いこと、第二、それにも関わらず何とか文章をひねりだそうとすると無理が生じ、ますます奇妙なものになること、そして第三に、ものを書くには時間がかかりますし、精神の集中が必要ですが、そのような時間をつくり、頭を切替えて、専門外のことを書くのは、仲々難かしいことがその原因です。

そんなわけで、今回も特にこれといったねらいを持った、内容豊かなものは書けそうもありませんが、最近とくに感じていることの一端を述べてみましょう。

近頃、巷間しばしば、今の若者はボキャブラリーが貧弱で表現も浅薄かつどぎつい言葉しかつかえないといわれています。ひどいのになると人種が違うのでないかとまで比喩的にいわれます。たしかにその通りで、学生諸君のレポートをみても、またゼミやコンパで話をしていても、このことは、誤字の多さとともに、私を一種のフラストレーションに陥らせるのです。明治生まれの老人の方からみれば、私の世代自体が、やはり貧弱なことばしか使えない世代にみえるでしょうが、そのことをも含めて、特に最近の日本語の乱れと貧困化は甚しく、このままでは日本語は近く亡びてしまうのでないかとさえ思えるのです。

文化人類学の考え方によれば、言語は、ある文化の精髄であって、文化は言語の中に凝縮されており、言語が破壊されれば、その文化は崩壊するといわれています。さればこそ、過去において世界列強の植民政策には、常に被征服民族の言語を破壊する試みが付随していたのです。第二次大戦後のわが国の国語教育が、戦勝国によるこのような政策の片棒をかついだとは思いたくありませんが、その原因が何であれ、今やわれわれは、日本文化そのものの継承の崩壊、したがってその破壊滅亡の淵に立たされているともいえるのではないでしょうか。旧かなづかいがわからない、少し難しい漢字は読めない。私が日本語で書いた書物が的確に解読できない、などといった現象は、この意味で、まことに不気味な兆候であるといわねばなりません。

それにひきかえ、謡曲の世界の表現は、何とすばらしいものではありませんか。日本語のもつ表現の豊かさ、その陰影の微妙さ、多元性、的確性を、改めて認識させられたのは、私が謡曲のお稽古をはじめて、謡本に接してからでした。

たとえば、「牡鹿の声も心凄く、見ぬ山風を送り来て、梢はいづれ一葉散る、空すさましき月影の軒の忍に映いて」は、これだけで晩秋の夕を描きつくしていますし、「宮漏高く立ちて風北にめぐり隣砧緩く急にして月西に流る」には晩秋の深更から夜明にかけての情景が風音や砧の音をまじえて視覚聴覚を含めて美しく表現されています。また何気ない短句に季節を的確にあらわしているものや、茫洋とした風景を読者の心像としてつくり出してくれるものも数多くあります。「西より来る秋の風の」「松のむら立ち霞む日に、汐路や遠く鳴海潟」などはその例でしょう。

さらに自然描写だけでなく、人の心の奥底、精神の深層の世界の表現もすばらしいものがあります。たとえば「求塚」の後シテの出以下は、さながら黙示録の世界をみるごとく、色彩と音響にあふれ、魂の苦患を見事に描いています。ことに「げに苦しみの時来ると、言ひもあへねば塚の上に、火焔一叢飛び覆ひて、光は飛魄の鬼となって、笞を振りあげ追ったつれば…せん方なくて、火宅の柱に縋りつき取りつけば、柱は即ち火焔となって…」というところなどまことにものすごい描写といえましょう。

このような簡潔、的確、豊かで立体的な日本語表現の真髄にあって、日頃の乱れた言葉の世界とのつきあいからくるフラストレーションを超越し得ることも、私が謡のお稽古から得られる大きな楽しみの一つなのです。

風韻ＯＢ会発足について

暖冬とはいえ、まだ桜の蕾も固い此頃、神戸大学風韻会ＯＢの皆様には、ますます御清栄のことと存じます。

さて、わが風韻会も、宇治正夫先生の御指導のもと、四十七周年の春を迎えることと相成り、現役学生は、このすばらしい伝統を承け継ぎ、精進一途、その芸は勿論、人間としても急成長し、会の内容はますます充実しつつあります。

また、先年の宇治風韻会六十周年、神戸大学風韻会四十五周年を契機として、先輩諸兄姉と、現役学生との交流も、ますます深まりつつあります。

ところが不思議なことに、わが風韻会には正式な組織としてのＯＢ会が存在しません。これは「神戸大学風韻会」は、会としては現役、ＯＢ一本の会の形になっているからでもありますが、卒業生は、現役時代、共に鍛え共に楽しんだにもかかわらず、一旦卒業してしまうと、春秋の現役学生の発表会に出演し顔を合わせる以外、親しく相集い、旧交を暖める機会を持てないでおります。ことに、種々の事情で謡を続けることができなくなった方々や、遠方であるため相互に交歓の機会を持てないでおられる方々にとっては、このことは余計に残念なことであると思われます。

このような事情を背景にして、今までに二度ほど、謡そのものにこだわらず、共に青春時代を過したＯＢの自由な交歓の機会を設けましたところ、大変好評で、多数の方々の参加を得ました。

そこで有志相寄り、この際正式にＯＢ会を発足させようではないかということになりました。ことに現役学生が、ＯＢ会を持ちたいという極めて強い希望を持っていることもあり、本年一月現役時代に幹事長として各学年を代表された方々に御意見をうかがいましたところ殆んど全員の御賛同を得ました。

つきましては、本年夏頃、神戸においてＯＢ会発足の総会を開きたいと考えております。具体的日程などは後日改めて御案内申上げますが、多数の方々の御参加を賜わるようお願いいたします。

なお、ＯＢ会といっても堅苦しいものではなく、大体次のような内容のものを考えておりますことを申添えます。

(一)名称（未定、何かよいのをお考え下さい）(二)目的（会員相互の親睦と現役学生との交流促進）(三)活動（年一回の総会懇親会、学生の発表会・合宿などへの参加など自由な交流、地区毎の集いも考えられます）(四)会員（神戸大学風韻会ＯＢ）(五)会費（なし、懇親会費などはその都度実費徴収）(六)事務（当分現役学生に委託）

いずれにせよ、早くＯＢ会を発足させることが肝要であると考えますので、ここに「風韻」誌上を借りて、皆様方に呼びかける次第です。

昭和五十四年三月吉日　　提唱者（敬称略）

藤井茂（前会長）、荒川祐吉（現会長）、米花稔（旧5）
里井三千雄（新4）、堤文男（新6）、原敏郎（新9）
段野治雄（新13）、山口剛（新22）、伏見正章（新25）
大西章博、遠藤隆、反田雅之（学生）

一月に各学年を代表された方々に御意見をうかがった訳ですが、その御返事の中の一部を紹介させていただきます。

○小杉岩蔵氏（旧十四回生）

会の名称考えてみましたが妙案が浮びませんのでお任せ致します。各地区に散在するＯＢ同士が随時集まり易いときに手近なところで集まれる方法も考えていただけたら盛り上ると思います。

（現役の人は、帰省時期に開けば出てもらえるわけですから）

○保坂　昌氏（新一回生）

お便り拝見。仰せのとおり今までＯＢ会がなかったことはまことに不思議、但し小生も今までそれをあまり意識したことがなかった。これは現役諸氏のふだんの会の通知やごくまれにではあるが集会に顔を出させて頂くことが何となくお互いのつながりも感じさせていたせいか。今回の発議まことに結構心から賛意を表し、協力させていただきます。

○大良晃彦氏（新十二回生）

相互に名前と顔が一致しないケースが考えられるので宴外に、卒年混成のグループで何かゲームの様なものを30分間位やってみるとどうでしょうか。思いがけない先輩（後輩）が実は勤務地や住居が近かったりすることを発見できると、卒年毎に団体できなくとも出席しやすくなるかもしれません。

○尾島洋三氏（新十五回生）

誠に結構なご提案に思います。小生も長らく東京勤務のため、なかなか同窓、現役の皆様と交歓の場がなく残念に思っております。謡会の有無に拘らず、是非交流の場を持ちたいものです。

会の名称は〝風韻〟がはいれば、いずれにても可と思います。お世話の皆様に宜しくお伝え下さい。

○中島克己氏（新十八回生）

是非共、よろしくお願い致します。会員皆様の御活躍をお祈り致します。

学生座談会

―風韻OB会発足にあたりて―

諸先輩方の御尽力によって、この度正式にOB会が結成される事となりました。この喜ばしきしらせに対して、現役学生はどういう感想や期待を持っているのでしょうか。編集部ではクラブ員に集まってもらい自由に語ってもらうことにしました。

（昭和五十四年　三月三日）

司　皆さんもすでに御存じのように、この度OB会が結成される事となりました。まず皆さんの感想から聞かせて下さい。

A　前から風韻会のような伝統あるクラブになぜOB会がないのか不思議に思ってました。それが今度OBの方々によって、OB会が結成されるというのを聞いてよかったと思います。学生としては大変歓迎したいと思います。

B　僕も同じ意見ですねえ。喜ばしい事だと思います。先輩の方々の親睦が深まる事によって、クラブに対する関心も高まるんじゃないでしょうか。

C　そう、先輩と現役学生との交流が一段と深まるんじゃないですか。

D　風韻会も宇治先生の御指導のもとで四十七年目をむかえた事だし、OB会がないというのも淋しい話ですしね。

A　これまでにも懇親会はあったけど、正式なものじゃなかったし……

E　二回ほどありましたけど、そのたびにこれまで発表会にはあまりお見えにならなかったような方も多く参加なさってましたね。

F　寄付金をもらいに行った時の話やけど出席したいという気持はあるけど発表会は謡をせなあかんし憶劫になって結局やめてしまう、と言われた事がある。謡ぬきの懇親会なら、今よりもっと大勢の人に集まってもらえるんちゃうかな。

B　それに発表会というのはあくまでも学生の会ですしね。これだけ諸先輩方がいらっしゃるんだから、先輩の会合というのもあった方がいいと思います。もちろん、発表会の方にも来ていただきたいと思いますけど……

司　現在、風韻会は財政的には先輩の寄付金によって支えられてますが、この点に関してはどうですか。

F　たしかに、OB会が出来て今までより大勢の人が来てくれたら、寄付金や発表会の役料もふえるかもしれんけど、あんまり変らへんのとちゃうかな。そりゃふえてくれたらうれしいけど、別にそのためのOB会とちゃうのやし。

C　僕も寄付金とOB会は切り離して考えるべきだと思います。確かに寄付金をもらいにまわるのは負担になっているけど、あれは先輩と親しくなれるというか、顔見知

しりになれるいい機会だと思うし積極的に評価すべきですね。

G　先輩の方には単に金銭的というだけでなく、色々と援助していただいてますので有難く思ってます。

A　三、四年前には会費制のＯＢ会をという声もありましたけど、僕は必要ないと思ってます。今のままでうまく行っているのだし、寄付金まわりを積極的に評価するという意見に賛成ですね。

B　同感ですね。

司　先輩方には今まで通り寄付金をよろしくお願いいたすとしまして、実際のＯＢ会の運営などについてはどのように思ってますか。

C　会の正式名称とか、会長・幹事の方などは先輩にお任せするとして、細かな事務などは僕たちで引受けるべきです。確かに仕事量はふえるかもしれないけど、いつもお世話になってる事だし、それ位は当然でしょう。

F　現実問題として別にどこそこにＯＢ会の事務局をおいてという訳にはいかへんしね。事務ぐらいはやるべきやね。

D　まあ当然でしょうね。それに、そんなにふえるという訳でもないし……

G　財政的に見ても、ＯＢ会の通信その他の事務に用いる位の余裕はあると思います。私も賛成です。

A　元幹事長の方々に出したＯＢ会の要綱にも、事務は現役学生に任せる。とあった事だし、これも問題ないと思う。

司　皆さん、事務は学生で、という事で一致のようですね。ところで皆さんはどういうＯＢ会になればと期待してますか。

E　幹事の方には風韻会の良きアドバイザーになってほしいですね。

A　元幹事長の方々の御返事の中にあったのだけど、各地方毎に分会をつくったらどうですかね。

C　ＯＢの方も全国各地に拡がっているし毎年神戸で年一回の総会というのでは集まりにくいでしょうし、凌霜会みたいに各地方に支部を作れたらすばらしいと思いますね。

E　それにはやはり各地方で、中心になってやって下さるという先輩がどんどん出て来てほしいですね。

F　それに学生もどしどしＯＢ会の会合に出席させてもらったらええんちゃうかな。いい機会やし……

A　最初のうちはなじみのない人が多いからあまりうまくいかないかもしれないけど年を重ねるにつれてだんだんうまくいくようになるのじゃないかな。

D　前にも言ってたのだけど、各学年に一人連絡委員みたいなものをおいたらどうかな。同じ学年同士で呼びかけるとＯＢ会にも参加しやすいでしょうし。

B　やはり知らない人ばかりだと足を運びにくいと思います。そういう意味では、学生ももっと積極的に先輩に話かけて顔を覚えてもらう必要があると思いますね。ＯＢ会に限らず発表会の時などをいかして。

司　いろいろと皆さんの率直な感想を聞かせていただきまして、ありがとうございました。我々現役学生も先輩方と協力してすばらしいＯＢ会にしたいと思います。最後になりましたが、荒川先生、藤井先生・米花先生をはじめとする発起人の方々の御尽力に心から御礼を申しあげます。

（おわり）

先輩登場

旅と謡

旧一回生　藤井　茂

1

謡の五徳とか十徳とかいわれるものの一つに、「居ながらにして名所を知る」というのがある。確かに、謡の曲目の中には名所の叙述や古事来歴に関するものが多い。田村や頼政にでてくる名所教えや竹生島や高砂などはその代表的なものといえよう。多くの物語りは土地と密接に結びついており、藤戸や隅田川のように地名が曲の名になったものも少なくない。曲中の道行きはその名の通り旅の道中の土地の記述である。それも西は九州から東は関東、東北にまで及んでいる。

かれこれ考えて、謡の作者達はよくもこれだけの地理を知りえたものと感嘆せざるをえない。恐らくは、多くの物語り本や紀行文、縁起、歴史書などによったものと思われるが、それにしても、実地に見聞した上でないと書けないのではないかと思われる節も少なくない。してみると、謡の作者達はよほど旅行好きの人達であったに違いない。旅行好きのわたくしは、六百年昔の観阿弥や世阿弥を旅行好きの人に見たてて、ひそかに心の通うのをたのしんでいる。

2

わたくしは旅先きで訪ねる土地が謡に関係があると、とくに親しみを覚え、謡の文句や表現と現地とを照らし合わせて、あれこれと往時を想像して楽しんでいる。昔のままに芦が生えていたり、松が茂っておれば問題はないが、それが工場地帯であったりすると、工場見学もさることながら、工場の煙を雲か霞かに見立てて別の楽しみを作り出すことになる。以前は汽車ものんびりしていて停車駅も多く、車窓や駅名に名所古蹟を楽しむことも多かったが、新幹線になってからそうした楽しみも減った。飛行機ともなればなお更である。

この間、時間の余裕があったので、名古屋から東京まで東名高速道路をバスで走ってみた。新幹線なら二時間のところを六時間十分かかる。その代りに、冬空にそびえる富士の晴姿を心ゆくまで鑑賞することができた。浜名湖に近づく三カ日の峠を下りにさしかかるや、はるか前方に雪をいただいた富士が姿をあらわす。遠くを馬の背で行く綿帽子の花嫁の姿にも似ている。それが静岡に差しかかるトンネルを出たとたんに、大写しになって裾野から頂上まで全貌をあらわし、足柄の休憩所まで二時間余りにわたって種々の角度を見せながら旅情を慰めてくれる。

冽によって、富士や箱根にゆかりのある謡を思うともなく思いおこしていた。羽衣や小袖曽我は申すまでもなく、東（あずま）への道行きでこの富士を仰ぎながら街道を通ったであろう幾曲かが去来し、そこはかとなく口ずさんでいるうちに富士太鼓にいたって、

「あっ、これは楽人の名であった」とリストから外ずすなど結構退屈がしのがれた。

「謡良し旅もまた良し富士晴るる

それにしても現代人はあまりにも交通機関が発達したために、つい自分自身も交通機関なみに忙がしいと思い込み、心のふるさとから遠ざかって行くような気がしてならない。

3

昨年、十一月、アメリカで国際学会があって出席したついでに、メキシコまで足をのばし、ユカタン半島の突端にあるマヤ文化の遺跡を訪ねた。十二月の風韻会物故社中追善謡会で鉢木を無本で謡うことになっており、宇治先生に旅行中に完全に暗記してきますといって出たものの、会議や旅のあわただしさに紛れて暗記する暇もなかった。ところが、メキシコ・シティのホテルで夜中に目が覚めた。

それからというものどんなに努めてみても一向に眠れない。寝坊のわたくしにとっては全く異常というほかはなく、遂に思い切ってマットの上に正坐し、腹に力を入れて鉢木一曲を初めから終りまで暗記している限り小声で謡った。次第に心も静まり呼吸も整ったとみえて、朝方再び眠りをえることができた。後で聞いてみると、メキシコ・シティは海抜二千三百米の高地で空気が稀薄、酸素も欠乏しているので誰でも眠りが浅く、長くいると不眠症になるとのことであった。

旅と謡との結びつきが、メキシコ・シティと鉢木の奇妙なめぐり合わせによって、わたくしにとって忘れ難い思い出を加えたことになる。

姫路時代のこと

―都留先生の思い出―

新十一回生　久下昌男

私の入学は昭和三十四年、当時の神戸大学は所謂タコ足大学で、一年半の教養課程を姫路と御影に分かれた両分校で過ごすことになっていました。私が配属された姫路分校には「紅葉会」―紅葉狩と好謡を懸けたものでしょう―があり、六甲台の風韻会に対して謡曲部のジュニア課程の感がありました。

学舎のはずれ、運動場との境、うす汚れた学生食堂の二階に、これまた大いに汚れ、畳の随所にタバコによるコゲ跡が残っている大小二間の和室があり、ここを囲碁部とか何部とかと雑居して我ら紅

葉会が根城としていましたが、稽古のときには関係なき者を隣の小部屋へ遠慮なく追いやって大いに蛮声をふりしぼっていたものです。

この食堂の二階はさながらの梁山泊で、昼休みともなると（別に昼とは限りませんが）下の食堂で仕入れたうどん（恐らく一杯十円程度だったでしょうか）をすすりながら碁を打つという輩のたむろする処でしたから、練習の際の隣の部屋からは我々初心者に対して心ない冷かしの罵声が頻々と聞こえていたようです。

かかるいかがわしき稽古場でしたが、女性の身ながらこれをものともせず、熱心にお教え下さっていたのが都留好子先生で、その当時四十を少し越えられたころではなかったかと思います。（何しろ女の方にお齢を伺う訳にも参りませんので定かではありません。間違っておりましたらお許し下さい）。その御指導はやさしい中にも酷しく、私にとって稽古日は苦しい中にも（苦しいのはもっぱら足の方ですが）楽しく待ち遠しい一時ではありました。

伊東正晴先輩（E10）が、女の美しさと醜くさは中年の女性に表現される。都留先生の場合は美しい方の最たるものである。―とのことを話されたのを憶えていますが、先生は確かに深井の面のような美しさを内に秘められた方でした。

先生の御社中の発表会には必ずお仲間に加えていただいておりましたが、これがまた我々の楽しみでした。何しろ先生の社中には、当然のことかも知れませんが流石に妙齢の佳人が多く、そこへ我々ムックケキ野郎どもが遠慮なく伺うのですからまるで美女に野獣ですが、ともかくお嬢さん方と一緒に謡うときの気分はまた格別で、同期の前田、森沢君なども大いに鼻の下をのばしていたようです。

姫路を離れ、六甲台時代には宇治先生に、卒業後は会社の文化会で黒田益三先生（井上嘉久師門）にいろいろ御指導をいただき、早いものでもう二十年を経ております。最近ではお稽古も休み勝ちですが、それでも謡は私の生活の中に完全に入り込んでいるようです。只、今にして考えてみれば、三つ子の魂と申しますが、私と謡との最初の出会いが、都留先生であったことが、私に幸せしたのかも知れません。本当に良かったと思っております。

とは申しながら、姫路を離れてから卒業前に一度お伺いしたことがありますが、その後は年に一度賀状で御挨拶申し上げるだけで、ついぞお目に懸っておりません。御元気にお過ごしの御様子ですが、何とも不精の弟子で申し訳けなく存じております。

声の出ない日に

新十九回生　高島千明

この間、〝フィガロの結婚〟をテレビでみた。ケルビーノのアリアなど、まるで小鳥がさえずっているようではないか。よくまあモーツアルトは、こんな音を人間が歌う部分に使ったものだ。彼の時代にも、こんな歌手がいたのかしら？とオペラの事は、あまりしらない私は考えてみる。〝魔笛〟にも、こういうところがある。最後パパゲーナとパパゲーノのかけあいのところ〝パッパッパッ〟〝パパパパー〟（私に楽譜が書けるといいのだけれど…。あのおたまじゃくしで語る事ができて聞くことができるなど、素敵な世界ではなかろうか）あそこは、笛のようだ。別にモーツアルトのオペラで

なくてよかったのかもしれないが、これを聞いた時、長い間持ち続けていた疑問の答えがあるような気がした。

これはもう、謡を始めた時から思っていた事なのだけれど、"なんで宇治先生の謡は、あんなに自然で感情がでるのだろう"私など"お腹に力を入れて""もっと大きな声で"と先輩にいわれ、先生にもいわれ、自分でもやっているつもりでもまるで力の入れ方、声の出し方に欠陥があるようなのです。それは例えば、勤め始めて生徒の喧噪の中で私の声はまるで通らないのに、同僚の声はスーと通るという具合なのです。"ああ、なんでこんな声を出すのが苦手なのが、謡など続けているのだろう。"

それが、あのケルビーノのアリアを聞いた時、"ああ、そうか。体全体を楽器に考えてみたらいいのかもしれない"

笛は、息を通さないと絶対音が出ない。私の声の出し方はどこかで息をとめてしまっているのだ。そこで、手許にあったランパルのレコードをかけてみると、このフルートの名手から奏でられる音はお腹で息をとめたり、圧力をかけないとでてこない類いのものらしいと気付いた。声を出そうとして出ない。力を入れようとして入らない。それが自分でもわかりながら、ああでもない、こうでもないと私の耳に快よい（いや、どうもお腹で感じるというのが本当なのかなとこの頃思う）音を探し求めて、肝心の心をこめて謡う事を忘れた私は、いつの間にかずいぶん横道にそれてきたようです。

大学入学当時、見も知らぬ人にのこのこついて行ったあの六甲台の部室で、生まれて初めて大声を出した爽快さに身を浸したのが運のつきだったのか。一年の時、鉢木の"ああ降ったる雪かな"と雪の冷たさがズシッとこたえるような、あの御影の道場の思い出が引っぱってきたのか。どうも、声を出すことも、仕舞をすることも、私が一番したい事でもなさそうなと迷いながら、いいものができるには、私の中に謡や仕舞に表出したい何かがなければ根本的にダメなのにと、疲れている時などまるで気のない声を出しながら今日も、ちゃんと声がでてくれるかなあと、おそるおそる声を出してみるのです。

ウトウトしながらみたあの仕舞、一瞬ドキッとしたあの動きは何だったのだろう。

登録商標
御菓子司
常盤堂
神戸市東灘区御影中町
電話神戸(851) 4677番

謡をはじめてはや一年

〈一年生のページ〉

J30　門之園　辰志

謡を始めて約8ヵ月が過ぎた。反省を試みるにはいい時期だと思う。とは言っても、8ヵ月もやってきた割には、今もおそらくJr合宿の時の実力に毛がはえた程度にすぎないだろう。なにしろ謡において最も基本的な二点が未だに体で覚えきれていないのだから、その1つは音階。普通の曲なら二三度聞けば自然に鼻唄となって出てくるぐらいなのに、殊に謡に関してだけはそうはいかない。まぁこれも幼稚園以来慣れ親しんだ西洋音階と約8ヵ月の謡の音階という歴史の差に比例しているのだろうが。そしてもう一つは腹に力をいれての発声だ。後で実例を述べるが、この2つの歯車がなかなかうまくかみあわない。どちらか一方に自信が持てるようになると解決の糸口がつかめるのだろうが。更にテンポが大切で、二年になると感情移入が新しい課題なるという。ああ、熱が出そう。

去年の夏合宿で謡について考える機会を得た。教材は忘れたが、福岡先生のレッスンだった。一通りやった後、今度は一度もつかえず最後までやるという課題があった。それがぼくには出来なかった。何度も何度も失敗した。業を煮やした先輩は「腹に力が入っていない」と叫ぶと同時にその扇が僕の下腹部に突き刺さった。下腹部の皮下脂肪が5センチくいこんだ。先輩の扇は今や精神注入棒と化していた。正直言って僕は恐かった。早く終業のチャイムが鳴ることを真剣に祈った。普段はやさしい穏かな先輩の顔が、まるで何かに憑かれたように恐しい表情をしていた。そのただならぬ形相に一瞬鬼の顔が重なった。（先輩、ごめんなさい）全身は一個の凶器と化したように強力な殺傷力を蓄えていた。それが目も向けられないような殺気となって僕を圧倒した。恐怖と焦躁が僕を包み、後は奈落の底への直通便だった。うまくやらねばという焦りが音程重視の方向へ走る。すると腹からの力が萎え涸み、先輩の怒りの扇が翔ぶ。そこで腹に力を入れようと努力すると音程がおろそかになる。このマイナスのフィードバックが僕に地獄を見せた。結局、最後まで先輩の満足の半分さえかえる域に達しなかった。

終った後も、先輩に対するすまなさと自己嫌悪のため精神の修羅状態は続いた。それと同時に一つの疑問が脳慮をかすめた。一体何が先輩をあのような尋常ならざる姿に変化せしめたのであろうか。ぼくの不出来に対する憤りだけではなかったような気がする。何かに憑かれたような、そう、偉大なる先人たちの夢が先輩の体を借り、自分の作品を汚した僕に怒りの一刀をあびせたのではないか？まさか、そんな新作能にもなりそうなことが原因であるわけがないが。一体、謡のどこにそんな魔力めいたものがあるのだろうか。結局、その時の答は今も出ていない。

A13 能勢恒男

「謡を始めて、はや一年」（重大告白をすると、本当は八ヵ月なのですが）という題で文章を書け、とのお達しが出た。僕は非常に困ってしまいました。わけのわからぬクラブ（風韻会のこと）に入り、わけもわからず大声を出し（声が小さいとよく注意されるのですが）、わけもわからず仕舞をやっているうちに、いつの間にか一年が過ぎてしまったという感じです。

初めて部室に行ったとき、声を出すのがとてもはずかしかった。そして、その練習風景たるや、僕の目には異様な光景と映ったものでした。入部するかどうか迷いながら部室通いしているうちに、とうとう居ついてしまいました。どうして風韻会に入部したのか、人によく聞かれますが、そういうときは適当に答えてきました。本当のところは自分でもよくわからないからです。それだけに、謡をやりたい、仕舞をやりたい、と自らすすんで入部した人のように、練習熱心ではないのですが、気楽にやっていけたらいいな、などと甘い考えでおります。

しかし、そうも言ってられない時もありました。次から次へと発表会があるからです。発表会が近づいてくると、さすがにのんびりとはしていられませんでした。特に素謡や連吟などは、自分が失敗すると他人にまで迷惑がかかりますから。覚えることが苦手な僕にとって、連吟は本当に頭痛の種です。

それにしても、よく一年間も続いたなあ、と自分でも感心してしまいます（感心するほどのことでもないけれど）。

T30 藤裏聡

第一章　（緑のガラス）　ふっと顔を上げると全くの別世界がそこにある。きらびやかな舞、重くて金縛りに会いそうな謡、時間をほとんど停止させてしまう囃子。どれをとっても僕には見慣れぬものばかりである。いったい僕はどこに来てしまったのだろう。一筋の光を求めて、はい上がろうとあがく。が、あがけばあがくほど別世界に落ちて行き、魔法の液につかる。あきらめて液の魔力に酔っていると、燃え上がる炎が眼に映り、やがて速度を増して赤々と僕に迫って来る。近付き過ぎてすっぽり炎に包まれる。包まれたかと思うと炎は急に小さくなり、替わって緑のガラスが現われる。うす暗い緑の箱に閉じ込められて、他に見える物はと言えば、幸いにも小さく揺れる炎が一つ、他には何も見あたらない。赤い炎の放つエネルギーが緑のガラスを溶かし始め徐々にガラスは溶け落ちる。ようやく堅く閉ざした箱から解放される。ふっと顔を上げると全くの別世界がそこにある。こんな事を幾度繰り返したことだろう。

第二章　（音）　あれはどこで聞いた音だったかなあ。確かに岩の上で聞いたような気がする。そうだ、林を抜けた所、深い谷底の見える岩山だった。いや、遠くに島が見えるごつごつした岩場だったかなあ。それとも…。などと考え込んでいると、「そろそろ準備せえよ」という声がかかった。もうこんなに進んだのか。切り戸の前に立つと、突如顔が引きつった。引きつった顔をそのままに、座るとすぐに謡いだした。緊張残して戻ってくると、後ろで切り戸が締まる。そうか、あれは風が岩間を吹き抜ける音だったのだ。

P30　金山　久仁子

幽霊のことを言うのに「とても恐ろしい」とか「とても幻想的だ」ということばは「感情に訴える」コミュニケーションとしては、全然役立たずである。それが絵画だとか音楽、詩、小説、演劇等というものの存在価値の一つなんだろうし、又たとえば「恐ろしい」状態をよく分析して、その効果的な表現法を探ったり、表現技術を修得したりする、というのが芸術の醍醐味なんだろう。まったく世の中には、いろんな不思議な粋な表現があるもので、それは結局、無数の世界が存在することになる。

私が最初「能」に魅かれたのも、こういう「芸術」の世界へのあこがれを、ずっと持っていたから。〇〇氏の「能というのはねェ、簡単な動作で深い表現をするのですヨ。例えば、顔をあげるだけで喜びを表わしたり、扇をかざして、遠くを見ているものを表現したり・・・」ということばは、私に新しい世界を垣間見させてくれました。頭の角度や向きで表現をする役者さん達の知性や。微妙な表現を大切に愛して、見逃さない人々の繊細さを想って、このような世界にもひたりたい。芸術の醍醐味を味わいたいと思ったものでした。

あれから一年。あてさて、能の世界に充分ひたれたでしょうか。私の希望する味わい方なら当然まだ答えはNoでしょう。今は、東京へ出かけるのに、駅へ行くべく戸外へ一歩出た状態なのです。

少しは発見をして、また少しは理想の表現を心に描いていながらSKILLの方がもたもたしていて実現できない。なんていうのはつらいことです。だから、今はひたすら

"早く芽を出せ　柿の種"

L30　小谷　直子

思えば古典芸能発表会で「能というのはこうして少しうつむくだけで面をくもらすといって悲しみを表わしたり・・・」という説明を聞いて、感情を全面におしだすのでなしに、秘めることによってより深い感情を表わすことのできる芸術があるなんてなんて素敵！などと思ったのが間違いのもとだった。そして薪能・燭能を見ていくうちに、能面とお囃子に魅せられてもうやめられなくなってしまった。しかし、まさか風韻会は能楽鑑賞のクラブでも能楽研究のクラブでもなく、実際に謡いや仕舞をすることに重きをおいたクラブである。故に色々な悩みがでてくる。そして、それは謡いの稽古の時に限らないものもある。私は、謡いによって自分の発声のおかしなところを思い知らされた。ふだん謀べる時にも喉をしめているとか、濁音が全部おかしいとか・・・。また、発声だけでなしに声自体が小さく聞き取りにくいとか。これらのことは、全て日常生活ではさほど困るということはなかったが、謡いでは致命的なものだろう。この一年間で、謡いの技術面での難しいことは何も獲得できるはずもないし、実際できなかったけれど、前にあげたような根本的なこ

とは少々ましになったと思う。ある日高校時代の恩師に「話す声がはっきりしてきたし、声も大きくなったな」と言われた時は嬉しかった。それに、謡いや仕舞の稽古を通じて、妙な羞恥心がなくなったことも感謝すべきことだろう。このように、私にとって謡い自身は、大学四年間続けられるかどうかさえまだわからないものだが、日常生活にも御利益のあるものだった。

L30　山下　美登利

入部して一年、人に「クラブで謡曲をしています」と言うたびにこれがまがりなりにも謡と呼べるのだろうかと自嘲気味な思いが頭をかすめないことはなかった。それほど謡というものは私の心の中に厳たるイメージで存在している。というわけで入部して一年足らずで技術的なことは何も書けないので近頃感じる所を徒然と書いてみようと思う。

私が初めて謡と接したのは文学としてではなく音声としてであった。高校時代の古典の教科書には謡曲がとりあげられておらず、謡本もましてや能も見たことがなかった私は謡曲文学というものに文字として目で接したことは全くなかった。音声として接したのは私の高校の付属していた大学の能楽研究部がグランドの芝生の上で正座して何やらおもしろい発声をしているのを聞いた時であった。それにもかかわらず不思議にも一度やってみたいものだと思ったのである。それが原因で風韻会にはいってしまった。能楽にひかれてなどという積極的理由でもなく何も知らずに勧誘によってなどという消極的理由からでもなく、あの不思議な空気の震えを自分で作り出してみたかったというと少々キザに聞こえるだろうか。そのためか内容のおもしろさよりも声を出して節を追うことが最初はおもしろくて節のある程度のパターンをのみこんでしまうと歌を歌うような楽しさが訪れた。しかし今そういった楽しさを通り過ぎて謡曲の文学性と能楽のもつ他の多くの素晴しさとを自分ながら考え合わせた時、何と底知れぬそれだけに魅力のある世界に少しでも首を突っ込んだものだろうと、楽しい後悔を味わっている今日この頃である。

スポーツ用品のことなら

御影スポーツ・センター店

神戸市東灘区御影本町4丁目7－17
阪神御影駅前
TEL (078) 811－6314

生田区三宮町1-5--2 サンロイヤル神戸
332-4954

風韻会のあすを担う

（昭和五十四年度幹事学年）

S29　古沢　智

幹事学年になって風韻会という重い荷物を背負わされた今、クラブの運営のむずかしさと責任の重さを感じている。クラブの運営は伝統・慣例によって押し流されがちである。しかし押し流されてもいいから、そこに我々幹事学年の個性を反映させたいと思っている。すなわち、「例年このようにしているから」という考えで処理されることを避けたいのである。しかし伝統・慣例を全く無視してクラブ運営が成り立つことはないので、そこは政党でいえば、中道革新派ということになるだろう。また幹事学年になれば、クラブ内では受動的立場から能動的立場になる。今まで前者に甘んじてきた自分が、はたして積極的にクラブ員に働きかけることができるかどうか不安である。

幹事学年では私一人だけが理系学部である。理系学部が文系学部より忙しいそうである。これは人によっても違うだろうし、実際にはあまり比較はできないだろう。しかしそのような差があっても、できるだけクラブ運営の妨げにならないように努めるつもりであるし、そのようにしなければならない。また理系学部に属していることの不利としては、部室があまりに遠いことである。いまさら部室を動かすことはできないから、文句を言っても仕方がないが。だから将来はできるだけ六甲台の学部の人を入部させることも大切かもしれない。

次に学連のことについてふれたい。学連の委員長が風韻会から就任した。今まで風韻会にとって学連は、空気の様にあるようでないような、あまり重要性を認めていない存在であったように思う。これは他の加盟大学に比べて、部員数など恵まれ過ぎているからかもしれない。このことが学連に対する姿勢の差に現われている。しかし学連を脱退して一つの殻に閉じこもるのは、大学のクラブとしての本来の姿に反するように思う。他の大学との交流は大きな魅力である。学連より三商大あるいは神戸四大学との交流を重視すべきであるという考えもあるだろうが、学連からの利益を断ち切る、そこまで至らなくとも学連とのパイプが細くなるのは、惜しい気がする。学連そのものの意義も見直されるべきかも知れないが、一年間学連委員をつとめて感じたことは、大学によっては学連を最大限に活用しようとする熱心さであった。そのような学連に対して、風韻会としての方向づけをしなければならない。

クラブ運営の基本方針が決定した。「練習第一主義」はその一つである。当然と言えば当然だが、そこに重要なのは、練習時間とそれ以外の時間との、はっきりした区別であると思う。クラブは練習のみすればよい場ではないが、クラブと同好会の区別も大切である。これは結局は学生のクラブとは、どうあるべきかといった問題になるのだが、そこをうまくコントロールしてこそ、「練習第一主義」

の重みが出てくるのだろう。

風韻会の明日を担って我々は動き出した。風韻会という重く、重心の高い荷物を、ゴールまで押しつぶされないで歩いていけるだろうか。どうもこの一年は平穏無事に終わるような予感がしない。しかし、私自身としては、多少ともスリルがあった方がよいような気もするが：

E27 嶋畑佳久

このたび、関西学生能楽連盟の委員長に就任することになり、その責任の重さに身の引き締まる思いであります。今まで、学連の辺境でくすぶっていた自分が、こういう役職につくとは、まさに現代は「不確実性の時代」と言えるでしょう。就任当初は、大変な仕事だとは思いながらも、仕事の内容が漠然としていて、具体的にどんな問題が、今の学連にあるのかさえ知らなかった。今から思えば、知らなかったからこそ、引き受ける覚悟ができたのだと思う。だが、就任してから、早くも三週間が経過した。仕事の内容が、わかるようになるにつれ、「これは、ほんまに大変やでえ」という実感が湧いてきた。全く今年中に解決できるのだろうかというような問題も残されている。だからと言って、ここで自分が弱音をはいて投げ槍になってしまえば、もう何もかも終わりだという事をよおく肝に命じておかねばならない。ここで体を張らねばならないのだよ嶋畑君。考えることは大事だが、とにかく行動しなければならない。神戸商大の退連問題にしてもそうだ。秋季大会不参加、定例委員会リーダーズキャンプの無断欠席などにより、商大の退連を認めるならば、立場上、どうしても永久追放ということにしなければならない。むしろ、永久追放にしてしまうのが正しいのかもしれない。しかし、いくら連盟規約の罰則に当てはまるとはいえ、そこまで心を鬼にすることはできなかった。だから、今年は元旦から、法王庁の抜け穴はないかと、規約との睨めっこが始まったのだ。おかげで抜け穴は見つかったが、「どうも言いのがれの感じが強い」という指摘を多くの人から受けた。それで、最後の手段として、一年間の休連案を持ち出した。今から思えば笑い話になるが、冗談抜きで、三日間ぐらい泊り込みで説得する覚悟で商大に行った。一日で話しがつくはずはなかったし、他の役員を三日間も徹夜に付き合わせるのは、あまりにも気の毒だったので、自分一人で行った。それが、一日目の夜八時には話がまとまり、みやげのリザーブで酒宴を張れたのは、意外だった。この事で、行動すれば、解決される問題も中にはあるのだという貴重な教訓を得た。これは、一月のリーダーズキャンプで承認してもらわねばならない。神よ、どうか執行部案が可決され、商大が一年後に復帰できますように。

とにかく私は、神大風韻会の明日ばかりでなく、関西学生能楽連盟に加盟している他の大学の明日もになわねばならない。すくなくとも今年一年間だけは、徹底的に私利私欲を捨てる。だが、考えてみれば、無欲に徹することは、非常に欲が深くなることかもしれない。自分だけの為という小我を捨て、昔流に言うなら、天下国家の為に働くのだから望みは確かに大きくなったと言えるだろう。

先日、聞いた話。

ある著名人が、対外政策の演説の末尾で、国を導いて行くには、行きかう個々の船の航海灯によらないで、永遠の星を基準にすべきであると述べて聴衆に感銘を与えた。ところが、そこに出席していた船乗りがとつとつとコメントをした。「たしかに天測航法は船のコースを決め、目的地に着くのに必要なものですが、しかし、船乗りの技術の試金石は、浅瀬や、霧や、吹くばかりで止めるてだてとてない嵐や、行きかう船なのです。そうした状況で事故もおこさずに船を進めることこそ、私達の任務だと思っております。」

天測航法も目前の難局を切り抜ける技術も共になくてはならないし、判断は総合的なものでなければならないだろう。この著名人と船乗りの会話が、実感として身にしみるのだった。

とにかく、死に物狂いで考えることだ。何かが閃くだろう。閃いたら、それを実現可能な具体案にまで煮つめること。それが、リーダーズキャンプで承認されたら、あとは体力の続く限り行動するのみ。

学問に精進するなら、ゼミという「お勉強会」に頼らず、一人でやるのが望ましいと思っている。他人の力を借りるにしても教授に頼るだけにするべきなのが、学問だと思っている。今、自分は、本来の目標から大きく遠回りしている。だが、この遠回りの道を進む間は、より多くの人の協力を得るように努力せねばならない。これを忘れずに、この一年間、奮闘したい。今まで神大風韻会という桑の葉を貧り食っていた蚕が、巨大なモスラとなって羽ばたくことができるだろうか。寺本博行さんという大物委員長を目標にしてがんばりますので、どうぞよろしくお願いします。

J29　田中邦子

「風韻会の明日を担う」なんと仰々しい題であろう。同時に、あまりにもお決まりの紋切り型とも言えるこの題を与えられた時、私は正直言って多少とも狼狽した。つまり何の準備も覚悟もなかったからである。もっとも、いくら私と言えども幹事学年としての気構えが、ぼんやりとした形でではあるが、頭の中になかったわけではない。しかし、それは単にイメージとしてあるだけで、あくまで、〃ぼんやりとしたもの〃の域を脱しなかった。それがこうして、文章という有形なものとしてまとまりのある物にしなければならなくなった為多少ともあわてたわけである。中には、私の幹事学年としての意識の低さをあきれ、嘆かれる方もあろうが、当然のことと思われる。

さて、原稿用紙を前にした私の心は千々に乱れた。ある時は、非常に希望に満ち、大きな自信と夢にあふれた気持ちになり、次の瞬間には全く悲愴的な思いにとらわれるといった具合いである。これではいけない。全くまとまらないではないか。少々焦りの気持ちも出はじめた。「担う」とは…？自分の責任として引き受ける、とは国語辞典。ではなぜ幹事学年のみが、こんな題を与えられるのか。本来風韻会を担っているのは部員全体ではないのか。そしてその未来を担うのは、我々幹事学年、及びこれから幹事学年になろうとする人々ではないのか。ここまで考えた時、私は前述の私の情けない告白の原因たるものが何であるかがわかった様な気がした。つまり一年入部以来現在まで私には、〃担っていることという意識がほとん

どと言ってよいほどなかったからである。部の中心はあくまで上級生であり、我々はそれに従う者という感が強かった。（但し、私だけの感覚であると思うが）ところが、二年の後半になって、半ばところ天式に、自分達がその立場に立つことになり、確たる信念、自信、覚悟ができていないというあわれな有様となったわけである。やはり理想は、一二年生の頃から、この〝担う意識〟を育て、二年の後半最高に高まったところで、あわてず、騒がず幹事を引き継ぐことであろう。以上、非常に頼りない内容ではあったが、これを文章化することにより、私自身の新たな心構えができればよいと思っている。（半ば、逃れられぬものという悲愴感もあるが）

ひとつ心にひっかかっているのは、本来、風韻会に所属する目的から生じた拘束ではなくて、所属していることによって生じた二次的拘束に甘んずることの嫌悪と反発そして、それを受けざるをえないというジレンマである。しかし、これは個人的問題であり、自己の意識の明確化の為に書くにとどめる。

終わりに、私のこのか細い両肩で幹事学年五分の一の責任をどこまで荷えるか、又、荷いきれずにつぶれてしまうか、一年後が楽しみでもあり、不安でもある現在の私の気持ちである。

仕舞三年謡十年というけれど

〈三回生の巻〉

T28　戸田真弘

「仕舞三年謡十年という説は、謡・仕舞の習得の上での一つの指標として、誰かが提唱し、それが今日まで認められてきたのであろう。

もしも仮に、この説を肯定的に考えてみたならば、一例として次のようになるのではなかろうか。

まず、仕舞についてであるが、これは、最初に基本姿勢・運足を習得し、次にそれらと平行して仕舞の中の様々な動作を習得する。これを第一段階とすれば、第二段階は、仕舞の中の登場人物の各場面における心情や、場面から場面への心の移り変わりなどを、十分に汲み取って、そして、能楽堂の舞台上において、それをもとにして、心に余裕を持って、ドウマイベストで仕舞をする事である。この二段階を習得するのに三年かかる、という事がつまり仕舞三年という事なのだろう。

次に謡についてであるが、謡を習得する為の第一段階は、まず発声練習をし、腹から声が出るように努力し、そして強吟弱吟などという様々な謡の文法的なものを習得する事であろう。第二段階は、謡本の構想や曲趣などを十分に理解し、なおかつ登場人物の各場面における心情、さらには、その登場人物が生存していた時代的背景をも十分に汲み取って、仕舞同様、能楽堂の舞台や発表会においてドウマイベストで謡をする事である。この技術的レベルを問題とする第一段階と、内面的なものを問題とする第二段階を習得するのに十年かかる、ということがつまり謡十年という事なのだろう。

以上くどくどと、この説の肯定論を述べてきたが、早い話、この説の言わんとする事は、一人前になるには、仕舞は三年謡は十年かかるという事なのである。

確かに、『仕舞三年謡十年』という説は、今まで述べてきたように考えるのが、最も妥当というか一般的な考え方なのかもしれない。しかし、私には、これだけではどうしても合点がいかない。なぜならば、世阿弥が集大成してから何百年という長い年月の間、受け継がれてきた能というハイカルチャ（この場合、崇高な文化という意味になるだろうか）を、仕舞は三年、謡は十年という短期間で習得する事ができる程、そんな通俗的なものであろうか。我々が考える以上に、奥深く趣きのあるものではなかろうか。このように考えると、仕舞三年謡十年という習得までの有限な期間を定める事自体、全くナンセンスであり、本当に死の瞬間まで謡・仕舞の習得に励む事が、本来の姿ではなかろうかと思うからである。

以上述べたような反論めいた事は、全くの理想論であり、プロにでもならない限り、いや、たとえプロであっても、考える必要のない事かもしれない。しかし我々学生が謡・仕舞を習得する上において、こういう気持ちで、普段の練習に励む事は可能であろう。たと

え、四年間で謡・仕舞との関係が切れてしまおうとも。

何か視点がぼやけてきた様だが、私の言いたかった事は、『仕舞三年謡十年』という説に固執する事なく、日々の謡・仕舞の練習にドウマイベストで励む事を忘れてはならないという事なのである。

P28 岡田裕子

「謡十年」―十年も稽古すれば、一応、一とおり謡えるようになるということなのであろう。しかし、ここでの一とおりできるとは、決して一人前になるという意味ではなく、楽しみらしきものがわかり始めるというか、やっと一段階終えたと考えるのがいいだろうと思う。十年を一つの節と考えてみてはどうであろうか。しかし、そこで、謡は十年単位―十年もかかるのかとせっかちになってはいけない。何事をするのにも始めからそれくらいの覚悟がほしいものだと思う。二年より三年、三年より五年と続けていくと、必らず上達し、自然と味が出てきて、おもしろくなり、稽古にも益々身がはいる、そういうものだと私は思う。

では、現在、私が十年も続けてやっているものがあるだろうか。元来多趣味で、小学校の頃から、一見親から強制的に習わされたと思われがちなおけいこ事を、実にタフにこなしていた。この段階では、まだ何をやったらいいか選択できない。だから興味のあることにできるだけ幅広く触れてみることが大切だと思う。あきっぽい性質になるのではないかという心配も当然でてくるであろうが、多少の回り道は目をつぶろうという気持ちでどっしりと構えていると、案外早く自分のやりたい一つの事が見えるものだ。私の場合は、中学の頃に定まったようだ。途中でやめてしまった芸事は惜しい気がするが、その各々の芸術分野に種をまく以前の、土壌を少し耕す程度にはなったのでは…と思っている。

話が外れてしまった。元にもどすことにしよう。十年以上続けているもの―ピアノのみ。十四・五年になるだろうか。しかし、決してすんなりと今に至ったのではない。習いはじめは、なんと言っても、曲があるのが一番の楽しみだったが、十年程経た頃から、これでいいんだろうかと思いはじめた。芸術観というものも、オーケストラに入って固りだした時だった。確かに音符どおりには弾ける。でも、この場合の曲想は？感情は？　私はこう弾きたいのに弾けない。どうすれば作曲家の表現したかったものを私が表現することができるのか。また、その表現は、私独自で造り出してよいものだろうかと、悩めるヒロインになりきっていた時期があった。その後、これらの問題を解決しないまま、受験のために一年間ピアノの練習を中断することになるが、復起後は、ピアノに対する構え方、力の入れ方・脱き方など基本的なことからもう一度みっちり身体で覚え直し、それから例の問題を解決することにし、現在進行中である。

このように、私のピアノは十年経て、ようやく転機を迎えたわけであるが、何事においても同じようなことがいえるのではないだろうか。謡では、はじめは、ただ、謡本に書かれていることだけを確実に謡えていれば、それで十分だが、だんだんと構成・曲趣・情景を考えて謡うようになっていく。我々学生では、この過程のスピー

ドが速いが、それは、大学のクラブ活動であるということに因る。一応の期間が決られている関係上、短期集中養成をめざさなければならないからである。そして、この限られた時間の中で、新入部員は二年後には、教える立場になる。たしかに、入部当時に比べると三年の謡には著しい進歩が見られる。しかし、それは今まで全然やったことがなかった物をやりはじめたから現れる進歩であり、まだ本物とは言えない。また、三年になるまでにはスランプがあり、そのスランプを乗り越えたんだから本物であるとも言いたいが、それも、まだ、本物のスランプとは言い難い、主に各自の責任による停滞・低下ではなかっただろうか。あの練習曲線の横にばかり伸びて上にちっとも上がらない時期は、一応一とおり謡えるようになってから、それからやって来るのだと思う。もちろん、大学四年間のうち、一度も壁に突き当たることもなく、順調に上達していくのだと言っているのではない。いろいろと悩みながら練習することもあるだろう。しかし、それは終わりのない芸術の道の、まだスタート付近での些細な事であり、これがあのスランプなんだと大袈裟に想い悲しむことではない。これから後に、本当の試練が待っているのである。

我々は、十年間を、また、できる限りのことを、四年間に濃縮するという意気込みで練習をしている。これは大切なことだ。しかし芸術というものは、そんなに短期間で成せるものではないし、きりがあるものでもない。どこまでいってもきりがない。そんな芸術の中においては、二年も三年も大差はない。まだ、駆け出しであり、これからどんどん伸びる有望な新芽である。したがって、練習量や深さといったものでは、長年やってこられた方々の足元にも及ばないが、我々は、謡に掛ける熱情と、持っている力を最大限に出すことによって、誰にもまねすることのできない、すがすがしい、学生らしい謡を謡うことができるのである。

P28 日下 恵津子

このクラブにはいって、もう三年になる。謡や仕舞の練習も、はじめて大声を出したあの日から、もう三年が過ぎようとしている。

よく、「仕舞三年、謡十年」と言われる。正しい解釈はよく知らないが、三年やれば仕舞は何とかものになり、十年やれば謡も何とかものになる、という意味だろうか。三年の間には、謡や仕舞が、好きになったり、いやになったり、ずいぶんころころと変化したが、それでもやはり、三年分の進歩はあるのだと思う。「三年分の進歩」の量に、一般的な一定の基準があるとしたら、きっと、私はその基準線にはひっかからないだろう。技術的にも、精神的にも。基準線をパスするには、あまりに未熟である。だけど私は、私なりにこの道を三年間歩いてきたのである。それは、能楽の門をくぐっているという自負でもなく、もっとうまくなりたいという向上心でもなかった。私は、私の道を歩いているということを知るために、そのひとつの手段として、謡や仕舞を選んだのだ。修羅乗りの練習から、緊迫感のリズムを知り、班女の仕舞で、想いを内にこめることの意味を知った。それらをひとつずつ知っていく自分を確認することで一歩ずつ歩いている自分を見ていたのである。そういう意味で、私

なりに、三年分の進歩はあったのだと思う。「仕舞三年、謡十年」のことばの中に、完成度の意味が含まれているとすれば、私の技量など問題外だけれど、ほんの途中経過として、三年間、そしてこの先の十年間をふり返ってみるなら、その人なりに、区切りのつく年なのかも知れないと思う。

能は、可能な限り、動きを省略したものである。私たちは、その単純な動きの中に、含まれている意味をみなければならない。じっとすわって動かないシテを見つめて、彼女の心に挑む。動かないはずの彼女は、つと立ち上がって私を見つめる。それから遠くを見つめて、こらえきれない感情のままに泣き、乱れるのである。白い面と重い装束が、彼女に超えてはならない一線を守らせている。心がどんなに慌れようと、白い面と重い装束をつけた彼女にできることは、ただすわって動かないことだけだ。

動かないシテ、動きのない舞台から、どれだけのものを観るかはすべて見所でみている人にまかせられている。遠い恋人を想う経験のある人なら、欄干に立ちつくす班女の見ているものがみえるだろう。親友とやさしい話らいの時間をもったことのある人なら、リンリンと鳴く松虫の声が聞こえ、二人の男の姿がみえるだろう。あるいは、その話の時代に詳しい人には、蒙華な宮中のようすや、瀬戸内の海に浮かぶ舟のようすがみえるだろう。能は、省略されればされるほど、観る人の力が必要になってくる。見えないものをみることが、能の世界を拡げることであり、見えないものは、いくらでもみえてくるはずなのだ。それが、能の世界の無限の拡がりなのだと思う。そういう意味では能は多様である。知識や経験に限りのある者には、低いレベルでしか存在しない。そのレベルでしか理解できない。私なんかには、グサッとくる発見である。

能の動きは、徐々に、単純化され省略化されたのではない。もともと、ぎりぎりの動きにしなければならなかったのである。それは能舞台に立つシテたちに課せられたつらい掟である。十の心を持ちながら、一の表限すら許されない。しかも、それは十の心を持った者にしかできないことなのである。

能の世界はきびしいと思う。私は能の知識もないし、能楽界の内幕を知っているわけでもないから、まちがったとらえ方をしているかも知れない。でも、能の世界は、きびしい世界だと思う。だから能を、自分を確認するための手段に使ったことに、自戒の念を感じる。私は、能と共存できるほどの人間ではないから、甘い自分の身を守るために、敢えて、手段というレベルに能をおとしたとも言えるだろう。

「仕舞三年、謡十年」――それは、その先にひろがる無限の時間を示唆していることばかも知れない。能は、個人の人生など軽く飲みこんでしまうなどの、巨大な時間を持っているのである。

今、卒業の時をむかえて

〈四回生登場〉

A27　井戸正二

いよいよ卒業する時が来た。いや、社会人として出発する時が来たと言う方のがよいかもしれない。我々は今までの学生気分から一変して、親から独立し、自分で生活する、いわば、未知なる実践社会に入ってゆくのであるが、卒業を前にして、あれこれ考えることが多い。クラブに入ってどうこう、クラブにどう望んだかなど、クラブと結びつけて考えることは省略して（風韻会と自分について思い悩む面が多いのであるが）僕の大学四年間の、しいては二十一年間に及ぶ教訓じみたことを述べてみようと思う。

人からよく大学ってどんな取り柄があるのかと聞かれるが、僕自身、その返答に困ったものである。それは大学でしか味わえない、いろんな体験ができること、ありとあらゆる自由な時間を自分で自由奔放に使えることだと思ったりする。いろんな人との出会いが最も貴重なことである。僕自身、いろんな人にめぐりあえ、意見を聞き、いろんな考え方を吸収できたことは幸せであり、これが僕の財産となると思っている。

みんな、人との出会いを大切にしたいものである。大学での友達や、恋人や、先生はもちろん、あらゆる人たちと接したい。出会いの場を広く持ち、生きてゆきたいものである。

僕はよく、自分（大学生）と同年輩のすでに就職して働いている人たちについて考えることがある。同じ年令でありながら、一方は実社会で働き、一方は勝手きままにふるまえるのである。このような立場にあり、現在の自分があまりにもはずかしい。何もすることなく終ってしまった自分がむなしい。極端に言えば、我々は何時に起きようが、学校で講義を受けようが、自由奔放に過ごせる。自分本位の生活ができる。しかし、働く者にとっては毎日が規制され、自分の時間が少ないのである。こんな中で、僕は時間にめぐまれているにもかかわらず、本当に満足のゆく生活が送れただろうかと疑いたくなるのである。正直言って不満の連続である。今になって改めて思うのであるが、僕は彼らに対してはずかしい。自由な時間を無駄にすごした自分がひどくつまらなく思える。大学生というからにとじこもって、何一つ発展がなかった。いなかに帰るといつも、同級先と酒を飲みながら話をするのであるが、彼らは人間的に数段うわ手である。彼らは自分の意見を持ち、しっかりしている。同じ年にして自分がこんなにひ弱なのかと残念である。みんな、我々は大学生として失格ではなかろうか。大学って無意味だ、大学生って何の役にも立たない、理論が先に立つ人間だと思うのであるが：。

最近、ある人から言われたことがある。それは「やろうか、やるまいか、どうしようかと迷っているとき、何もせずして後悔するより、やってしまって後悔する方がいいことだ」と。確かにその通りだと思う。大いに行動に移すべきである。理論よりもまず実践である。失敗してはじめて理解できるものだ。

みんな、大いなる自分の夢を持って、ふんばりたいなあ。人との出会いの場を広く持つのも良し、酒を飲みすぎるのも良し、恋人をみつけて話をするのも良し、とにかくフィーバーしようじゃないか。それが自分に満足するのなら、いいと思うのであるが……。

P27

樽本玲子

六甲おろしの冷たい針が身を刺すようになると、別れの季節がもうすぐそこまで来ていることを感じる。とうとう自分の番が回ってきた。何とも言えない一抹のわびしさがあるけれど、あまり感傷的にならずに、いつも練習を終えて帰るその時のようにサラリとこの部室を出て行こう。

私はどうして四年間も部室に通い続けたのだろう。時折失意して風韻会に見切りをつけようと思いながら、なおも執拗に足を運んでしまった。それはどうしても得たいものがあったという理由からだと思う。得られたかどうかは卒業して二〜三年経ってみないとわからない。それは御推察通り、謡や仕舞ではない。

確かに風韻会は変わった。少しずつでも出入りがあるから当然のことかもしれない。時代の流れのせいなのか、はたまた私が四つ年をとったせいなのか。

四年生という学年は、なぜかむなしい。何をするにしても。たまには一年生にもどったつもりになって練習し、そして遊べたらよかったのになあと悔やむ。今さらあとの祭り。一年生の時から今まで年令相応に成長してきたかと自問。よくわからないけど少しは成長したのだと思っているよと自答。一年生と四年生とでは人間的にそんなに違うものだろうか。"慣れ"の勝負という気もする。

風韻会でいろいろな勉強をさせてもらった。世の中にはいろんな人がいる。風韻会も一種の社会の縮図のようなもの、これからも一生続けなければならない世渡りに、少しは役に立つこともあるだろう。集団の中で自分は今何をすべきかを考える姿勢を、常に保とうと心がけることを覚えたことは、一番の収穫だと思っている。

愚痴を言うのはよくない。人はそれぞれ最善の策だと考えて行動しているのだろうから。助言忠告大いに歓迎、しかしそれをとり入れるかどうかはまた別の話。

二年生にはナマケ虫、三年生にはイヤケ虫、四年生にはイジケ虫が住みつくという（私説）。一年生諸君頑張れ！

とにかく、学部より長いお付き合いの風韻会様、ほんとうにお世話になりました。最後に思う存分あがいて、そしてお別れしようと思います。

和洋家具

早川家具店

神戸市東灘区御影本町4－12－8
御影市場南入口
☎ 078－851－3340

御集会、コンパ、宿泊にどうぞ

六甲パーラー

六甲団地西
TEL 861－6890

ー後輩諸君へー

E27 伏見和政

クラブ活動には、必ず自分自身で何らかの目的を持って参加してください。今さらこんな事と思われるかも知れませんが、大学におけるクラブ活動は中学高校時代のそれよりもさらに自主的なものであると同時にクラブの各人に対する責任もより大きくなっています。それ故に、クラブ員個人のとり組み方によって、四年間のクラブ生活が非常に意義深くもなり、また、やっかいな事にもなりかねないのです。もし、クラブ員の中に「とにかく四年間続ければ、少なくとも何か得るものがあるだろう。」と思っている人がいるとしたらそのクラブは将来性のないものになってしまうでしょう。クラブは個人の集合体であり、各々の情熱が互いに触発し合ってクラブ全体が盛り上がっていくものであると思うのです。だから自分が努力すれば、それだけクラブ全体も活発になり、また、やりがいも増してくる、これは余りにも単純な考え方かも知れませんが、要するに、これから神戸大学風韻会を支えてゆく方々に、頑張ってくださいと言いたいのです。自らの四年間の行動を反省するとともに、若い、あなた方の活躍を期待して、私の引退の辞に代えさせて頂きます。

英国パブ ミスタージャック

イギリス・チューダー朝の落着いたムードと当店自家製料理でワイワイガヤガヤ、いまのあなたにぴったりのパブです。
しかも、低料金ですので、お気軽に御利用下さい。

○謝恩会・クラク会・2次会・その他の会
○小グループから 150 名様迄
お気軽に御相談下さい。
○ジャックのお帰りには名曲喫茶上高地のコーヒーを御飲食下さい。

〈ボトル料金〉
サントリー(オールド)3,300円
サントリー(リザーブ)3,800円
ブラック&ホワイト 3,800円
ホワイトホース 3,800円
カティ・サーク 3,800円

PUB
英国パブ
ミスタージャック

三宮三劇前大山ビル2F
PM4：30～AM12：00
TEL078(332)2128

あしあと

昭和五十三年度

三月

三日（金）～九日（木）　春季合宿

於兵庫県美方郡浜坂町諸寄　民宿「まるや荘」

練習曲　一年「養老」「嵐山」「箙」「東北」「殺生石」「小鍛冶」「鞍馬天狗」。二年「高砂」「頼政」「屋島」「井筒」「三井寺」「鉄輪」「安達原」。他に仕舞各一番

まだ寒さが残る日本海のすぐそばで、二十名が参加して行われた。田中恭先輩がかけつけて下さり、御指導して下さった。

十一日（土）　慰労ハイキング　（国立民族学博物館へ）

十八日（土）　第二十六回生歓送謡会　於学生会館六階ホール

舞囃子「野宮」（田中明）「富士太鼓」（飯田）「松虫」（松本）素謡十一番　連吟三番　仕舞三番

宇治先生・荒川・米花先生・伊藤・江谷・牧・里井・佐々木・原・中島・段野・志智・小田・木村富・飯田・寺本木村升・森・加藤・児島・広野・田中恭諸先輩が御出席下さり大変盛会であった。また終了後の懇親会で、杉本先輩がビールを持って御参加して下さったので、学生一同は感謝感激。

四月

上旬～下旬　新入生歓誘

オリエンテーション参加、説明会開催及び個人的アタックの結果、男子三名女子三名が入部した。

十六日（日）　神大・神商大・大市大能楽部ソフトボール対抗戦

三十日（日）　宇治風韻会　於大槻能楽堂

二、三、四回生が参加

五月

三日（水）～五日（金）　旧三商大交歓会

今回は大阪市立大学が主催であり、六十谷ハイキング、発表会（於九皐会館）、懇親会と順調に終えたが、一橋大学が参加しなかったのは非常に残念。

七日（日）　新入生歓迎ハイキング　（甲山へ）

十三日（金）～十五日（日）　ジュニア合宿　於摩耶山大蔵院

練習曲「橋弁慶」「吉野天人」「大仏供養」「土蜘蛛」

一、二回生中心の合宿である。児島先輩が参加して下さった。

六月

七日（水）　古典芸能発表会　於学生会館六階ホール

仕吟部。邦楽部。落語研究会。宝生会。風韻会が合同して行ったが、観客は部員が大半であった。

二十五日（日）　関西学生能楽連盟春季発表会　於大槻能楽堂

連吟「大仏供養」「吉野天人」。仕舞「胡蝶」「松虫」「敦盛」「経正」「合浦」「笠之段」

七月

二日（日）　四大学合同発表会　於上田能楽堂

素謡「鞍馬天狗」「殺生石」。仕舞「玉之段」「山姥」「忠度」「清経」「天鼓」「班女」「嵐山」他八番

甲南大学主催で行われ、発表会、交歓会ともに成功裡に終わった。

六日（木）　面のスライド映写会　於学生会館第一集会室

八日（土）　謡納会　於部室

二十二日（土）～二十四日（月）　学連リーダースキャンプ　於信貴山

八月

四日（金）～十一日（金）　夏季合宿　於滋賀県伊香郡余呉町　民宿「文右衛門」

練習曲、一年「竹生島」「経正」「田村」「羽衣」「菊慈童」「小袖曽我」「富士太鼓」「猩々」「紅葉狩」。二年「賀茂」「敦盛」「清経」「熊野」「善知鳥」「班女」「舟弁慶」「鵜飼」

お忙しい中、戸次・高島・木村富・加藤・飯田・山岸先輩が参加して下さった。また寺本先輩より合宿中のようすを尋ねるお電話をがあり、藤井先生からは戸次さんと共にスイカの差し入れをいただき、暑い中大いに涼をとることができた。

十月

八日（日）　宇治風韻会　於湊川神社能楽殿　有志七名が参加

十一月

十一日（土）～十二日（日）　六甲台祭園遊会　模擬店「猩々」出店

日曜日は雨にたたられたにもかかわらず、快調な売れゆきであった。荒川先生・木村富・加藤・児島・伏見・山岸田中明先輩方も御来店になり、大変楽しい二日間であった。

十八日（土）　五十三年度秋季発表会　於学生会館六階ホール

舞囃子「班女」（福岡）「敦盛」（田中）「融」（岡田）。

素謡九番。連吟二番。仕舞二十番

宇治先生・荒川先生・伊藤・杉本・里井・戸次・志智・木村富・山中・児島・加藤・伏見・小島・田中恭・林・田中明・山岸・飯田・中井諸先輩が御出席して下さった。

十二月

九日（土）　ライオンズクラブ式典賛助出演　於湊川神社能楽殿

連吟「菊慈童」。仕舞「高砂」「箙」「井筒」「天鼓」「融」「江口」「難波」

九日（土）　神戸商科大学自演会賛助出演　於上田能楽堂

連吟「経正」

十日（日）　関西学生能楽連盟秋季発表会　於上田能楽堂

連吟「鳥追舟」。仕舞「草子洗小町」「羽衣」「王之段」「猩々」「田村」「小督」「芦刈」「松風」

十六日（土）　謡納会　於部室　その後クリスマスコンパ

決　算　報　告　書

自昭和53年 1 月 1 日
至昭和53年12月31日

収入		支出	
今期部費収入	239,840	先生謝礼	174,000
大学援助費	90,000	三大学発表会	6,520
先輩寄付金	357,590	四大学発表会	17,500
風韻広告料	58,300	秋季発表会	134,628
発表会役料	120,800	歓送大会	138,185
合宿・懇親会残金	12,675	学連費	24,000
S52年度猩々売上	23,368	学連舞台料	14,800
その他援助金	100,000	風韻印刷代	105,000
繰越金	8,311	通信・交通費	57,581
		文具費	3,490
		写真代	5,910
		Jr合宿援助費	4,979
		その他	2,194
		来期繰越金	322,097
	1,010,884		1,010,448

決算報告書について

昭和五十二年七月に行なわれました「あおぐ会」の残余金は、銀行に預けさせていただき、今後の部の充実に充当させていただきます。また、昭和五十三年十二月に甲南ライオンズクラブの式典に賛助出演を依頼され、出演いたしましたところ部活動の運営のためにと援助金をいただきました。

酒・米・たばこ

井口酒店

神戸市灘区山田町三丁目
(但し六甲登山口交叉点南)
電話 821－4148番

※※※※ 新役員紹介 ※※※※

幹事長	B29	反田 雅之
副幹事長	J29	佐野 邦子
渉外		
渉内	S29	古沢 智
文総		
会計	J29	田中 邦子
学連（委員長）	E29	嶋畑 佳久
	L30	小谷 直子

幹事長就任にあたつて

B29 反田 雅之

五十年、それはもう歴史であります。

風韻会も迎えて四十七年。自ら歴史を造り上げてきたという事実には、注目すべき二つの意味が含まれています。一つは風韻会が四十七年間存続しているということは、とりもなおさず良き事、悪しき事が自然と陶汰されてきたということ。もう一つは風韻会が自己存続の為に価値あること、無価値なことを判断する独自の意志をすでに持ち合せていることです。

先日、さる政治家が〝天健行〟などという言葉を言っておりました。天はあるべき姿に向って正しく動くということです。今はただこの言葉通り『私達幹事の指針、あるいは運営姿勢、それらに付随する幾多の誤りも風韻会はかならずや正しく陶汰してくれるだろう』という希望を持ち幹事長を迎える次第であります。

以上、何か不明瞭な言葉の羅列となりましたがこれを幹事長就任の挨拶と代えさせていただきます。

尚、いろいろお世話をおかけすることになると思いますが、宇治先生・荒川会長　ならびに諸先輩方よろしくお願いいたします。

昭和五十四年度行事予定

3月2日～8日	春合宿（於和歌山県日高郡由良町）
17日（土）	歓送謡会（於学生会館六館ホール）
4月上旬～下旬	新入生歓誘期間
5月4日（金）	旧三商大合同発表会（主催一橋大） ジュニア合宿・新歓ハイク
6月17日（日）	学連春季発表会

おもわず
素晴らしいと
聲をあげてしまう
あなたさまのみの
創作きもの

お気がるにローンで
神戸市生田区三宮町一ノ五
三宮店
電話(332)〇〇五二九〇〇二七八
砧(きぬた)

7月上旬	四大学合同発表会（主催商大）
8月上旬	夏合宿
11月17日（土）	自演会（於学生会館六階ホール）
12月9日（日）	学連秋季大会
22日	謡納会・クリスマスコンパ

コンパの御用意は当店で

酒類・食料品商

みどりや

神戸市灘区六甲台町６番２１
（六甲団地の下）
電話（861）0535番

◎文具ならなんでも揃う
◎謄写版用品・印刷・はん
◎事務用品・事務機

サヌキヤ

東灘区御影中町３丁目（バス道）
☎851－4087

伝言板

○昭和五十三年

二月　中塚久美子（旧姓中村）さん（二十回生）御結婚！

四月　志智敏一氏（二十一回生）小田裕美嬢（二十一回生）御結婚！

十二月吉本勢津子（旧姓広野）さん（二十五回生）御結婚！

○四回生就職決定！

井戸正二　株式会社ダイエー

岩崎　誠　凸版印刷株式会社

遠藤　隆　住友銀行株式会社

大西章博　愛媛県庁

伏見和政　トヨタ自動車販売株式会社

黒川昌代　教員

樽本玲子　教員

編集後記

◇「風韻」第十九号をお届け致します。お忙しい中、原稿をお寄せ頂きました皆様方に深く御礼申し上げます。

◇いろいろな意味で風韻会は、変わりつつあるといわれています。そうした中、部員達は何を考え、何を求めてこの風韻会にかかわっているのでしょうか。今年度はある程度テーマを定め、各学年の特色を出すべく努力してみました。

◇学生時代の思い出、最近の出来事など何かありましたら正式な原稿でなくても、葉書の片すみにでも一言お書き添え下さい。この「風韻」を諸先輩相互の、また現役クラブ員との対話の場として大いに利用していただければ、と思います。

◇いよいよお別れです。なごりはつきねど我ら四回生は、巣立ってゆきます。前途様々たる未来に向かって！

編集委員　四回生一同

昭和54年 4月 8日 印刷
昭和54年 4月10日 発行
発行所 神戸大学風韻会
神戸市灘区六甲台町
印刷所 みなと出版印刷株式会社
神戸市灘区浜田町2丁目5の3
電話 821－8331(代)

雑誌からコピー印刷まで……
みなと出版印刷(株)
阪神新在家下車東150米高架下12-11
TEL.(078)821－8331(代)

神戸ではじめてのビデオパブ
あなたもスターの気分で唄えます……
飲んで唄って
今夜も
ごきげん
パブの廉価システムと
TVスタジオの
ムード
いっぱい
jumbo pub
LOVE・SPACE
ジャンボパブ
三宮・生田神社前
☎331-9582